

情 熱

岡崎市国際交流協会

会 長 加藤 正男 氏



教育随想



月 報

岡崎の教育

平成14年2月1日

2月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想	1
岡崎市国際交流協会 会長 加藤 正男氏	
この人に聞く	2
近藤 聡司氏	
羅 針 盤	2
算数・数学科指導員 蜂須賀 渉	
ふれあい	3
藤川 小 吉川ほづみ 河合 中 清水 隆史	
特 集	4
将来への第一歩「立志」	
お知らせ	6
フォト・ヒストリー	8
林間学芸会（大正14年）	
この本を	8

「教育」という重要なテーマに対し、今回、姉妹都市ニューポートビッチのマクロード夫人から届いた教育問題の現状のリポートを紹介し、ご参考に供したいと思えます。

日本と同じく、アメリカの先生も数々の難しい試験に合格して初めて資格を取得し、教鞭をとることになります。教師とは、優れた能力に加え、教育に対する情熱を持ち続けることによりはじめて成立する天職ではないでしょうか。しかしながら近年、難関を突破し、情熱を持って教職についても、短期間で教職を離れる先生が特に小学校で多くなっています。

なぜこうしたことが起きているのでしょうか。一番大きな理由としては、先生がもはや教育に専念できず、

先生としての自信を失ってしまうからです。

今日、アメリカでは家庭内で様々な問題を抱えている子供が増えています。劣悪な環境の中で生活をしている子供たちは、勉強どころではない、教師は教育をすること以外で気を使い、神経をすり減らしています。こうした状況の中、生徒の親は子供たちの学力低下を教師のせいにし、先生はますます情熱を無くしていくのです。

社会を形成する核となる家庭環境の悪化、両親の存在意識の希薄化は、いまやアメリカ社会全体に及ぶ深刻な問題です。それゆえどんな困難が存在するとしても、学校を中心とする社会、そして家庭が力をあわせて、先生が質の高い教育をもっと広範囲

に展開することをサポートすることが肝要であり、いずれにしてもどんなことがあってもわたしたちが希望を失うことがあってはなりません。

先生方のご苦勞を感謝し、ご発展を祈る次第です。

（かとう まさお）





伝統芸能に懸ける

日本吟剣詩舞コンクール準優勝

近藤 聡司 氏

力強く足を踏み込む音、気合いのこもった掛け声が響き渡る剣詩舞の稽古場。

剣詩舞、それは詩吟に合わせて刀や扇などを手にした舞いのことである。「自分からやりたいと言ったらしいけど、自分でも記憶にないんです。自然とこの世界に入っていたというのが現実ですね。」

と、剣詩舞を始めたきっかけを話してくださった。それもそのはずで、何と三才から始められたそうである。平成十一年には、全国大会個人の部

で準優勝に輝き、今年も全国大会への出場を決めている。

父親の清治さんは、「岡崎市子ども伝統芸能祭」事務局長を務められ、当日聡司さんは、スタッフのリーダーとしてお手伝いをされている。子供たちの活躍ぶりを、

「一言で言うと、すごい。小学生でもここまでやれるかという感じです。」と、目を細められた。

最近では岡崎市内の多くの小中学校に招かれて、文化体験講座も行っている。

「まず、切腹を演じるんです。すると生徒たちはすぐに引き込まれますね。ちよつと今からやってみましょうか。」

と、実演された。がらりと表情が変わ



り、空気に緊張がみなぎった。生徒たちが引き込まれるのもうなずける。

「生徒さんたちが、お札の手紙をくれるんですね。それを読んでいるとうれしくなります。」

と、にこやかに話された。

このような活動を通して、子供たちに伝えたい思いを尋ねた。

「何かひとつでもいいんです。自分の好きなことでもいい。ずっと続けることが必ずよい結果につながる。やり続けることが大事。そういうことを分かっていたきたい。」

二十四年間という年月の重みに裏うちされた言葉だからこそその説得力がある。

そんな努力家の近藤さんも、個人の部での全国優勝という夢がある。

「音楽に合わせるだけでなく、昔の人に成りきって踊らなくてはだめなんです。優勝できないのは努力が足りないからだと思います。」

どこまでも向上心の絶えない近藤さんに、剣詩舞の奥深さと魅力を感じずにはいられなかった。

氏名 こんどう さとし
 生年月日 昭和四十九年八月十二日
 住所 大平町瓦屋前五十四番地六



家庭科室での算数の授業

算数・数学科指導員

蜂須賀 渉

最近、「学力低下への懸念」がマスコミで報道されている。私たちは、学習のねらいを明確にして、基礎・基本が確実に定着できる授業を展開しなければならぬ。また、指導内容が厳選され、授業時数が縮減された新しい教育課程の始まりが間近に迫っている。学習のねらいを一段と明確にした授業が要求される。

それらを踏まえた授業は、本年度でも数多く実践されている。

二年生のかけ算では、「九九ができるようにすること」も大切であるが、「かけ算の意味」を十分に認識させる必要がある。「考える力」をつけることも、同等に重要である。

A 小学校の二年生は、「かけ算の意味」の学習の舞台を、子供が興味を持つものが数多くある家庭科室に設定した。

学ぶ楽しさ

藤川小 吉川ほづみ

「今日、やつと陣取りゲームの結果がわかった。大逆転して勝ったから、ラッキーだった。いつも算数がやりたくてしやうがなかった。待ちきれなくなつてやつとわかつた面積の求め方。またやりたい。」

五年生のA男の算数日記である。彼は、授業に対し、ほとんど受け身であった。しかし、この学習では違つていた。

ゲームが大好きなA男。友達と競うことでやる気が出てくれたらと思つた。また、やや不器用な彼だがパソコン操作なら楽しく取り組めるのではないか。A男が学ぶ楽しさを感じてくれることを願つた。

第一時、直角三角形の面積の求め方を発表した後で、A男がこっそり



自分なりの求め方を教えにきた。その後、A男が考えたことを、こんな考え方もあるという意味で、クラスのみんなに伝えた。A男は、恥ずかしそうに、でもとてもうれしそうにほほえんだ。

次の時間から、彼はとても意欲的に取り組んだ。みんなに認められたことや、はさみで切つて考えるより移動ややり直しの容易なパソコンを上手に扱えたことが、彼のやる気を高めたのだろう。発言も積極的になり、生き生きと学習する姿が印象的だった。



文化祭で

フォークダンスを

河合中 清水 隆史

「今年の文化祭でフォークダンスをやりたいのですが、いいですか。」と生徒会のA子から申し出があった。

この時期授業後は、学習相談・駅伝の練習があり、A子たち役員にとつて、文化祭の計画準備の時間が取れず、苦しい状態であった。その上、やると決めたフォークダンスの曲が

手に入らず、A子は悩んでいた。

「もし難しいなら、別の機会にやってもいいんだよ。」

と声をかけたが、A子はあきらめなかつた。オクラホマミクスサーの曲を口ずさみながら、当日に備えて生徒会役員だけで練習をしていた。

前日になつても曲は手に入らず、本番に間に合うことを願つて、A子は母親に購入を頼み、当日を迎えた。



不安を隠し、常に笑顔を絶やさず司会を進めて行くA子。午前の部終了直前、買ったばかりのCDが母親から届いた。

「お願いです。どうしても今日やらせてください。」

A子の真剣な表情に押され、時間を延長して、フォークダンスが行われた。自分たちが企画したことをやり遂げたA子に、わたしは惜しみない拍手を送つた。A子の顔に満足感があふれていた。

かけ算は、同じまとまりがいくつつかある場合に「○の□つ分」と考える。

「同じ数のまとまり」を意識させる必要がある。このとき、紙の上の知識だけでなく、算数的活動を通じて、体験的・経験的に学習を進めるとよい。

A先生は、前日から家庭科室でのセツティングに熱が入る。

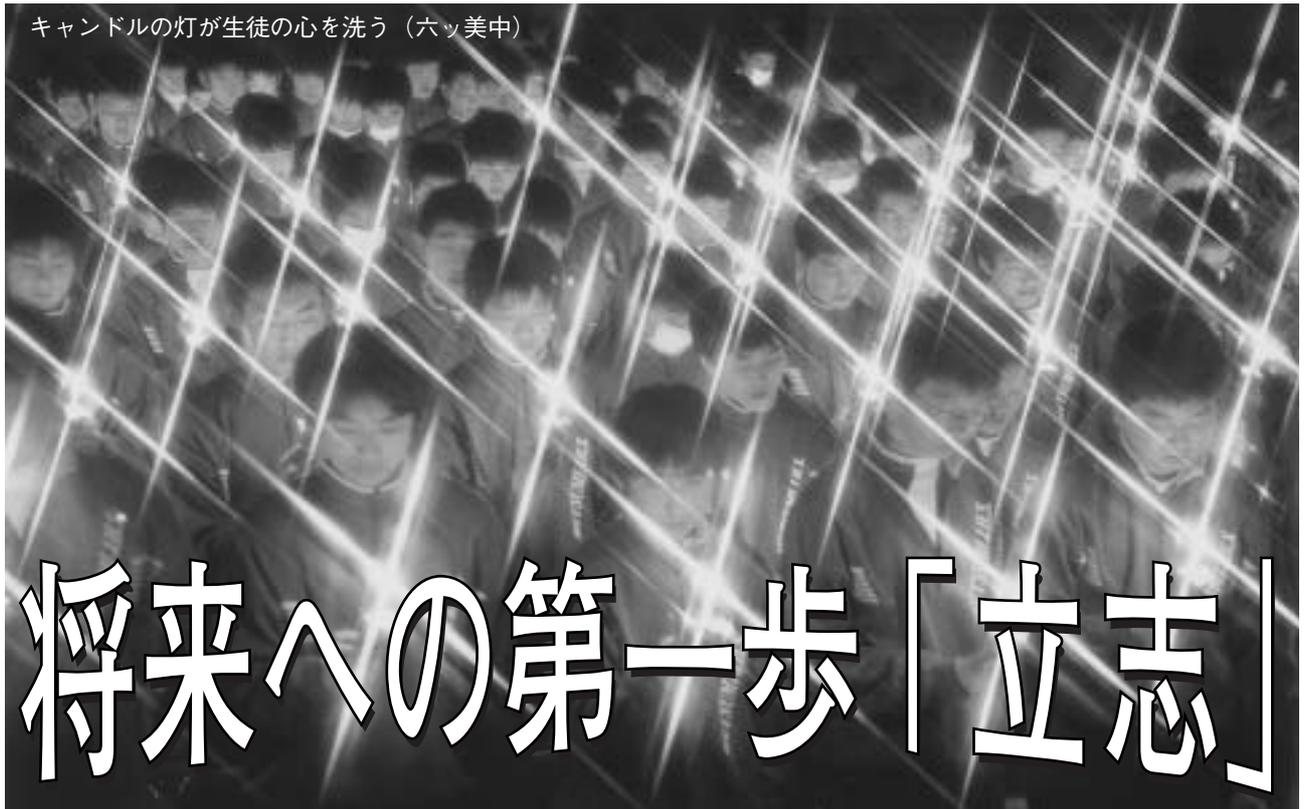
- ・二本のフォークがのつた皿を五つ
- ・三個の角砂糖がのつた皿を九つ
- ・八個の飴がのつた皿を二つ

など、すべて戸棚の中に隠すように置き、子ども自身が「発見」しながら学習できるようにした。

当日、広い家庭科室で活動する子どもたち。戸棚の中の品物を発見したことに喜びを感じ、自然と学習の世界に入つていった。「三個の角砂糖ののつた皿が九つあること」を発見すれば、三×九と立式し、三十三三十三三十三と、たし算に夢中。そして、出た答えが正しいかどうか、具体物を使って確かめる子供も現れた。

「まとまりの発見」⇨「かけ算の立式」⇨「たし算で答えを出す計算」と学習のねらいに合った子供の活動になっていた。具体物を操作したことにより、かけ算の意味を量感的に捉えることができた。まさに「家庭科室での算数」という発想が生きていた。

キャンドルの灯が生徒の心を洗う（六ッ美中）



将来への第一歩「立志」

「立志」それは、今の自分を見つめ、将来へ羽ばたく大きな夢を心に刻むひとつの節目である。現在、多くの中学校でこの「立志」にかかわる行事が実施されている。

岡崎市内の中学校で「立志」を行事として行ったのは、昭和四十年の城北中学校が初めてであろう。その後、連綿と引き継がれ、広まってきた。「立志の式」では多くの場合、保護者からの手紙などを読み、これまでの自分の成長を振り返り、将来についての誓いを立てる。運営方法は時代と共に変遷し、現在では「立志の式」と他の活動とを関連させ、各学校が工夫して、多彩な形式で行われている。

例えば、自然教室（スキー・夏山）の一環として実施している学校がある。親元から離れ、自然に囲まれた環境の中で、より深く自分を見つめ、将来について考えられるようにしているのである。また、職場体験と関連させている学校もある。職場で実際に働くことよって、社会の一員としての自覚を持たせ、生徒たちの「立志」につなげていくことをねらっている。

ほかに、富士山登山、朝日を目指した夜間遠足など、生徒が厳しい体験を乗り越えることを、将来に向けての「立志」としている学校もある。新しい傾向としては、総合的な学習の時間と「立志」を関連させて行おうとしている動きがあげられる。

こうした様々な形が模索されている「立志」。生徒たちが将来に希望を持って歩み始められる活動を、これからも目指していきたいものである。



▲将来の夢を誓う立志の式（城北中）



▲日本一の山頂を目指す富士山登山（甲山中）



▲親からの手紙に涙する生徒たち（岩津中）



▲遠望峰山^{とぼねやま}で朝日を迎えたナイトハイキング（葵中）



▲働く喜びを学ぶ職場体験学習（竜海中）

「立志」にかかわる活動	
（平成13年度）	
自然教室（スキー・夏山）と関連させている 9校
職場体験と関連させている 4校
登山・遠足と関連させている 3校
総合的な学習の時間と関連させている 7校
式を独立させている 2校
今年度は内容を検討中 2校

▶西浦海岸を目指すサンライズウォーク（北中）



お知らせ

● 教育最新情報

○ 奉仕・体験活動

「21世紀教育新生プラン」
七つの重点戦略の中に、「多様な奉仕・体験活動で心豊かな日本人を育みます」という柱がある。

奉仕活動を体験することは、①他人に共感し思いやる心を育む②自分が大切な存在であることを実感③青少年が社会に参画していこうとする意識の高揚といった意義がある。そこで、学校や地域社会を通じて子供たちの社会奉仕体験活動、自然体験活動等の体験活動を促進することを提言したものだ。

これに伴い、学校教育法の一部を改正する法律が、昨年六月に成立した。



（概要）児童生徒の体験的な学習活動、特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるものとするとともに、この場合において、社会教育関係団体その他の関係団体及び関係機関との連携に十分配慮しなければならないこととする。

岡崎市においては、ほとんどの学校が奉仕活動や自然体験活動に取り組んでいる。

奉仕体験の例としては、葵・城北中学校のように開校当時から活動もある。地域の道路や川・神社を子供たちの手できれいにする取組で、同様の活動が、小学校では二十九校、中学校では十五校で実施されている。その他、緑化・長寿者訪問・医療施設慰

問・トイレ磨き・募金といった活動が挙げられる。

学校・学年としての取組から、総合的な学習の時間での実践、あるいは、保護者を巻き込んだ活動もあり、方法も様々工夫されている。

また、緑丘小学校のように、ボランティア委員会が全校に呼びかけ、自主的参加を募るといった新しい方向も見出されている。



▲ささゆり保護（新香山中）

今後は、子供自ら奉仕活動に意欲をもつような働きかけが必要となろう。

自然体験活動についても、「岡崎市少年自然の家」での活動の他にも多くのことを取り入れている。小学校では二

十四校、中学校では八校が、独自の取組をしている。

地域の特性を生かした農業体験や環境保護活動が主流となっている。「ふるさとタイム」で探鳥活動を続ける生平小学校では、鳥の鳴き声を聞き分ける子供が育っている。また、米・漬物・炭づくりなど地域の方を講師にして体験学習が進んでいる。

北中学校では、朝日を見るため岡崎駅から西浦海岸まで歩く体験をしている。このように地域を離れての体験を実施している学校もある。

これからの教育において、実体験からの学習が十分展開できるよう期待される。



▲若狭湾自然の家（広幡小）

● ハートピア岡崎だより

○ 猿田の丘

澄み切った青空の下、小学六年男子A君、同じくB君と連れ立って衣文（そぶみ）観音へ散歩に出かけた。A君はその日初めて通所してきたばかりであり、B君は三日目という、共に新入りである。

並んで歩く。しばらく歩くとお互いの心が通じ合っているのを感じる。「君の好きなことは何」などと言葉を交わす。自然の中に身を置き、体を動かし、言葉を発することで硬さがほぐれ親しさが生まれてくる。そんなわけで、通所して間もない子供たちとよく散歩に出かける。

十五分くらい歩くと衣文観音に着く。学校に行けますようにと願いを込めてお参りする。裏に回って碑の前に立つ。名古屋市立本宿郊外学園の碑である。

この碑文には、戦災孤児の生活・教育施設としてこのお寺が使われたこと、間もなく「猿田の丘」に新しく宿舍と



▲本宿郊外学園の碑

校舎が建てられその地に移ったことなどが記されている。この「猿田の丘」がハートピア岡崎の地（上衣文町猿田）であり、この校舎が今のハートピア岡崎の建物である。ハートピア岡崎の施設が、もと「働く者の山の家」であったことはよく知られているが、そのまた前身が「本宿郊外学園」であることを知っている人は少ないであろう。この碑の前に立って、解説を交えながら碑文を読んでやる。二人は神妙な顔をして聞いている。ハートピア岡崎の地理と歴史を知り、そこで暮らした人々の思いを感じ取ってほしいと願うのである。帰路、「猿田の丘」へ登る道はかなりの急坂である。汗ばんだ顔を過ぎる風が快い。

●表 彰

◆第三十五回愛知県教育研究 論文

- 個人研究の部
 - 優 秀 井田小 寄田加津子
 - 佳 作 根石小 平野 泉

◆平成十三年度愛知県読書感想文コンクール

- 六名小 佐渡 明美
- 竜谷小 斎藤優亜子
- 大樹寺小 神谷 敦仁
- 矢作西小 柴田 知子
- 北 中 山本 則夫
- 共同研究の部
 - 佳 作 三島小現職教育研究会
 - 代表 藤江 敏夫
- 矢作東小現職教育部
- 代表 太田 恭子
- 六ツ美西部小五年生部会
- 代表 船越 学

◆平成十三年度健康優良児童生徒

- 最優秀賞
 - 山中小三年 高木 竜一
- 優秀賞
 - 葵 中一年 細川 亜子
 - 廣幡小二年 新田 ゆか
 - 連尺小六年 市川妃かり
 - 南 中二年 種島 香澄
 - 美川中三年 内田まなみ

◆平成十三年度よい歯の児童生徒

- 優 秀 賞
 - はじめ一二四名

◆平成十三年度よい歯の児童生徒

- はじめ一二四名
- 小豆坂小六年 熊野 麻子
- はじめ一二四名

◆平成十三年度岩瀬賞 (体位優秀校)

- 小学校男子 六ツ美中部小学校
- 小学校女子 六ツ美北部小学校
- 中学校男子 城北中学校
- 中学校女子 東海中学校
- 歯科医師会長賞
 - 城北中学校

◆歯科治療率一〇〇%校

- 小学校男子 常磐南小学校
- 小学校女子 常磐南小学校
- 常磐東小学校
- 恵田小学校
- 六ツ美中部小学校
- 山中小学校
- 生平小学校
- 秦梨小学校
- 常磐南小学校
- 常磐東小学校
- 恵田小学校

◆第十七回海とさかな作品コンクール

- 日本水産株式会社賞
 - 緑丘小学校 六年一組
- 感動賞
 - 改善祭五年 清水希和子

◆第三十八回全国児童才能開発コンテスト (作文部門)

- 文部科学大臣賞
 - 緑丘小六年 粟生 智香

●都道府県教育長協議会幹事長賞

- 緑丘小二年 若田 拓也

◆第八回県中学校力又ー大会

- 新人戦 (総合の部)
 - 優勝 新香山中学校

◆第二十回県中学生バレーボール 新人大会

- 男子 三位 竜南中学校
- 女子 優勝 矢作北中学校
- 二位 東海中学校

◆平成十三年度西三河バスケットボール総合選手権大会

- 男子優勝 附属中学校
- 女子優勝 竜海中学校
- 三位 竜南中学校

◆第六回小学生クラス対抗

- 三十人三十一脚全国大会
 - 三位 本宿小学校六年一組



▲第50回 岡崎市学校保健大会

・カ
ツ
ト

竜海 中 志賀 孝人



林間学芸会

(大正14年)



写真提供 梅園小学校

冬の風物詩の代表であつた学芸会。最近は二学期に実施する学校が多くなつたが、日ごろの学習の発展として、創造的な心を育てるといふ意義は現在も変わらない。

写真は、大正十四年、梅園尋常高等小学校(現・梅園小学校)の児童が学校近くの「石山」で林間学芸会を行つてゐる様子の様子である。現在のようにな学芸会だけでなく、朝会学芸会や供養の会学芸会、また、七夕祭りやひな祭りなどの機会をとらえ、学習や唱歌、劇などの発表を行つてゐた。

大正当時、発表力の育成を目指して多様な活動が行われていたことがうかがえる。

この本を

- * ノーベル賞10人の日本人
読売新聞編集局編
中央公論新社 ￥760
- * 同じ年に生まれて 小澤征爾・大江健三郎
中央公論社 ￥1400
- * 風の耳朶
理論社 ￥1600
- * 絶滅寸前季語辞典
東京堂出版 夏井いつき編 ￥2200
- * タリバン イスラム原理主義の戦士たち
アハメド・ラシッド著
坂井定雄・伊藤力司訳
講談社 ￥2400

9・11の同時多発テロ事件がなければ、おそらくほとんどの人が関心を示さなかつたであろう「タリバン」および「アフガニスタン情勢」。あの事件以来、書店の一角には、この手のコーナーができて、幾種類もの書を集めている。本書はその中で、昨年ベストセラーになった。

タリバン、つまりイスラム学生だがそのほとんどが戦争未経験でありながら、なぜ国土の大半を制圧するに至つたのか、それを克明に記している。今、私たちのだれもが、中東情勢に無関心ではられない。

オオイヌノフグリあまの小さな瑠璃色るりの花が、田畑の畦道や川の土手に咲く季節になつた。冷たい風が身を切る日もあるが、「光の二月」、日差しあまの明るさが加わり、季節はゆつくりと春に向かつてゐる。子供たちの「春見つけ」の活動がそろそろ始まろうとしてゐる。

シオ スア

白く息を凍らせながら、受験会場に向かう中学生。声にはならないけれど、思わずエールを送りたくなる朝。きつと胸中には、不安と未来への熱い想いが詰まっているのだらう。我が子の受験のように、心配しながら待機する教師たち。春よこい、早くこい。

新しい工夫が見られる、各中学校の「立志」。どの試みも、生徒たちが将来に夢を持って進んでいけることを願つて行われている。立志の式や夜間遠足などで見られる生徒たちの表情に、自らを見つめ直し、将来へ羽ばたきたいこうとする意志が感じられた。

すべての子供たちに確かな学力を保障すべく、県教育委員会は、小中学校の基本三教科で二十人程度の少人数学習を進める方針を固めた。一人一人の子供たちに、より目の行き届いた指導が可能になる。基礎基本の徹底は私たち教師の責務である。